

19世紀自由ハンザ都市ハンブルクの市民と協会： ジングアカデミーの「復活祭コンサート」に注目し て

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院文学研究科： 都市文化研究センター 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): 19世紀ドイツ, ハンブルク, 協会, ジングアカデミー, 慈善 キーワード (En): 19th Century Germany, Hamburg, associations, Singakademie, charity 作成者: 犬童, 芙紗 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171213-059

19世紀自由ハンザ都市ハンブルクの市民と協会

—— ジングアカデミーの「復活祭コンサート」に注目して¹⁾ ——

犬 童 芙 紗

◆要 旨

1830年代前半のハンブルクには、貧困層の増加を巡る社会問題の深刻化を背景に、市民の有志によって貧民支援を目的とした慈善団体が相次いで設立された。

ハンブルク・ジングアカデミーは、1819年に音楽愛好家の市民を中心に結成された混声合唱協会であるが、19世紀ハンブルクにおける市民音楽生活や合唱音楽文化の発展において重要な役割を担っていた。だが、ジングアカデミーの活動について、一次史料を基に調査したところ、その活動には慈善的側面もあったことが明らかとなった。ジングアカデミーは、1835年以降、毎年聖週間に「復活祭コンサート」を開催し、入場券やテキストの販売を通じて得たその収益金を、慈善のために寄付していたのである。

本稿は、19世紀ハンブルクにおけるジングアカデミーの社会的役割やその活動の意義について、ジングアカデミーの「復活祭コンサート」に注目して検討し、そこに、当時のハンブルク市民の社会に対する意識がどのように表れているか、ジングアカデミーの議事録およびジングアカデミーの公開の演奏会に関する市参事会と教会の史料を基に、考察を進めた。

その結果、ジングアカデミーの復活祭コンサートは、当時、ハンブルク市民の有志が慈善団体を通じて取り組んでいた貧困を巡る社会問題への対応の一形態であったことが示された。ジングアカデミーは、演奏会の収益金を地元で活動する慈善団体に寄付することを通じて、その活動を支援する役割を担っていたのである。ジングアカデミーと慈善団体相互の関係は、19世紀ハンブルク社会において、様々な市民団体が互いに役割分担し、協力し合いながら公共善の促進のために活動していた実態も示している。ジングアカデミーは、市で活動する様々な協会の一つとして、19世紀ハンブルクの社会的文脈の中で活動し、音楽文化活動に取り組む一方で、社会の公共善の促進にも努めていた。

キーワード：19世紀ドイツ、ハンブルク、協会、ジングアカデミー、慈善

(2013年9月10日論文受理, 2013年11月8日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

はじめに

1765年、自由ハンザ都市ハンブルクに「愛国協会」(Patriotische Gesellschaft)²⁾が設立された。「愛国の」(パトリオーティシュ, patriotisch)あるいは「パトリオティスムス」(Patriotismus)とは、共同体への帰属意識や公益に対する奉仕を意味する言葉である³⁾。愛国協会は、市の公益への寄与を目指して活動し、七年戦争(1756-1763)によって打撃を受けたハンブルク経済を立て直すことを目的に掲げて設立された当初は、市の商工

業の活性化と貧民支援に重点を置いて活動していた⁴⁾。ハンブルクの愛国協会は、近代ドイツに設立された「協会」(Verein)の例として、しばしば言及される⁵⁾。協会とは、ある特定の目的のもとに自由意志で集まった人びとによって結成され、自分たちで定めた会則に基づいて活動する組織である⁶⁾。

ハンブルクは、北ドイツのエルベ河畔に位置し、中世のハンザ以来、商業や貿易で栄え、神聖ローマ帝国皇帝直属の自由都市(Freie Reichsstadt)⁷⁾として、いかなる領邦君主にも従属せず、都市としての独立と

自治を有していた。領邦君主も宮廷もなく、貴族も家臣もない帝国自由都市という条件の下、ハンブルクには、他のドイツ語圏の都市に先駆けて、自己意識を持った、共同体のために参画する市民階級の台頭が促された⁸⁾。

協会は、しばしば活動目的に公共善の促進を掲げ、社会改良や慈善を目的とした活動を行っていた⁹⁾。ヨーロッパ規模で成功をなすとげた最初の世俗的な市民結社とされるフリーメイソン¹⁰⁾の理念には、個々人が徳と社交、慈善を実践することを通じて、公共善を促進するというものが見られる¹¹⁾。フリーメイソンの会所とその慈善への努力は、協会の活動の模範にもなる¹²⁾。ハンブルクにおいても、フリーメイソンの会所は¹³⁾、会員から徴収した年会費、入会金、寄付、罰金を活動資金源としていたが、余剰収益は、援助を必要とする仲間の支援や孤児院への寄付のために供していた¹⁴⁾。また、1789年にハンブルクに設立された協会「ハーモニー」(Gesellschaft „Harmonie“)は、会話、意見交換、読書、ゲーム等を通じて会員同士が交流するための社交協会であったが¹⁵⁾、会員には、毎年、年会費に加えて、「救貧金庫」(Armenkasse)¹⁶⁾にも金銭を納入するよう定められていた¹⁷⁾。

ハンブルクのフリーメイソンは、1770年代に、4つの会所が合同で、毎年貧民のために慈善演奏会を開催していた¹⁸⁾。慈善演奏会とは、入場料の販売や寄付金の募集を通じて得た収益金を、貧困層や孤児の救済、病院や施設の建設資金の援助、被災地住民への支援など、慈善活動や福祉への寄付を目的とした演奏会のことである。公共の制度がまだ十分に整っていなかった19世紀ドイツの社会においては、下層民や被災地住民を支援することは、市民の役割と見なされていた¹⁹⁾。慈善演奏会は、合唱協会によってもしばしば行われる²⁰⁾。合唱協会とは、1791年に「ベルリン・ジングアカデミー」(Sing-Akademie zu Berlin)が設立されたのを機に、18世紀末から19世紀にかけてドイツ各地に設立された、音楽愛好家の市民たちを中心に自発的に結成された合唱活動のための組織である²¹⁾。

ハンブルクには、1819年に「ハンブルク・ジングアカデミー」(Hamburger Singakademie)が設立された²²⁾。ジングアカデミーは、音楽を職業としないアマチュアの音楽愛好家から成る合唱団であったが、19世紀ハンブルクにおける市民音楽生活や合唱音楽文化の発展において、重要な役割を担っていた²³⁾。だが、ジングアカデミーの活動について、一次史料を基に構築したところ、その活動には、慈善的側面もあったことが明らかとなった。ジングアカデミーは、1835年以降、毎年聖週間に「復活祭コンサート」(Osterconcert)²⁴⁾を開催し、入場券やテキストの販売を通じて得た収益金を、地元ハンブ

ルクで活動する慈善団体に寄付するようになったのである²⁵⁾。これは、ジングアカデミーの活動には、合唱への取り組みを通じた会員の自己修養や会員同士の社交のみならず、公共善への寄与という要素が含まれていたことを示している。だが、ジングアカデミーはなぜ1835年になって、慈善を目的とした演奏会を開催するようになったのであろうか。

ハンブルクは遠隔地交易を軸に経済活動を展開し、1820年代以降、交易網をアメリカ大陸、アフリカ、東アジア、南太平洋へと拡大し²⁶⁾、世界経済において重要な都市に発展する。経済が発展するにつれて人口も増加し、1811年に100,000(市壁外領域Landgebietも含めて132,000)であったハンブルクの人口は、1821年に128,000(同154,000)、1830年には144,000(同174,000)にまで増加する²⁷⁾。この急激な人口増加の背景には、市外から大量の失業者が流入したことも挙げられる。大都市ハンブルクに働き口を求めてやって来る者もいれば、乞食として、住民の気前の良さをあてにしてハンブルクにやって来る者もいた²⁸⁾。貧民が増加するにつれて、貧困を巡る社会問題が深刻化する。19世紀前半のハンブルクでは、住民の5分の3は困窮した生活を送っていたと見られている²⁹⁾。また、1830年代には1年当たり、全住民の16.4%に当たる人びとが、1788年に愛国協会によって設立された「一般救貧施設」(Allgemeine Armenanstalt)による支援の対象となっていた³⁰⁾。ジングアカデミーが1835年に慈善を目的とした復活祭コンサートを開催するようになったことは、当時のハンブルクの社会状況とどのように関わっていたのであろうか。

19世紀ドイツの合唱協会に関する研究の大部分は、これまで男声合唱協会の合唱祭や祝祭の政治的機能など、ドイツ統一を目指す政治運動との関わりで行われてきた³¹⁾。それに対して、本稿は、ハンブルク・ジングアカデミーの活動を例に、合唱協会の慈善を介した、都市社会史の中での役割について考察する。

以上のことを踏まえて、本稿は、19世紀ハンブルクにおけるジングアカデミーの社会的役割やその活動の意義について、ジングアカデミーの「復活祭コンサート」に注目して検討する。そして、そこに、当時のハンブルク市民の社会に対する意識がどのように表れているか、考察する。考察に際しては、ハンブルク州立・大学図書館が所蔵しているジングアカデミーの議事録³²⁾およびハンブルク州立公文書館が所蔵しているジングアカデミーの公開の演奏会に関する市参事会と教会の史料³³⁾を利用する³⁴⁾。

1. 19世紀ハンブルクの社会と協会

1-1. 愛国協会とハンブルク

領邦君主の支配を受けず、都市としての独立と自治を有していたハンブルクは、「市参事会」(Senat)を頂点とする統治体制を敷いていた³⁵⁾。ハンブルク市参事会を構成したのは、遠隔地商人と法律家である³⁶⁾。

ハンブルクの愛国協会は、1765年に、市参事会員、学者、聖職者、ジャーナリスト、商人等、市の政治、経済、文化活動において指導的地位にある人々が集まって設立された³⁷⁾。愛国協会の中心的理念となる「パトリオティスム」は、共和政体を敷き、自治の伝統と商業による繁栄を享受するハンブルクにおいて、最も重要な市民的美德と見なされていた³⁸⁾。それは、市民、とりわけ富と地位を手に入れた市民は、自分の時間、労力、財産を公共のために使用することを通じて、公益に奉仕するというものである³⁹⁾。

愛国協会は、七年戦争後のハンブルクの経済不況の中で設立され、市の商工業を活性化政策の一環として、まず、ハンブルクの手工業製品の質を、当時、市内に流入していた良質な外国の手工業製品に比肩しうるものに高めようと考えて、手工業者の育成に取り組んだ⁴⁰⁾。そのために、愛国協会は、1767年に、若手の大工、石工、鍛冶屋、陶工、家具職人、彫刻家の教育を目的とした製図学校を⁴¹⁾、さらに1770年には、キャラコに模様を描く職人のためのデッサン学校を開校した⁴²⁾。

また、愛国協会は、経済不況を背景に増加した貧民を支援するための政策として、1778年に「一般積み立て基金」(Allgemeinen Versorgungsanstalt)を設立する。その基金の目的は、使用人、日雇い労働者、手工業者、船乗り等の低所得者層に貯蓄を奨励し、将来の経済的困難に備えさせることであった⁴³⁾。そして1788年には、愛国協会の主導で、市参事会による支援のもと⁴⁴⁾、「一般救貧施設」が設立された⁴⁵⁾。一般救貧施設は、貧困層に対して、物質的な支援を提供する他、労働による自助を促し、就労可能な者には仕事を斡旋し、貧困層の医療や出産に対する支援、失業者への職業の斡旋や職業教育、及び貧困家庭の子どもたちに対する教育活動を行う等⁴⁶⁾、18世紀末から19世紀にかけてのハンブルクの救貧政策において大きな役割を果たす。1793年には、数人の若い商人たちが中心となって、募金を集めて、一般救貧施設に寄付することを目的とした「貧民のための協会」(Verein der zum Besten der Armen)も設立された⁴⁷⁾。

愛国協会は、1839年に「ハンブルク歴史協会」(Verein für Hamburgische Geschichte)が設立されると、その歴史研究を通じた郷土の町への貢献という理念に共鳴し

て、その活動を支援した。愛国協会は、ハンブルク歴史協会に対して、愛国協会の建物の中にある集会室で会合を開き、図書室を自由に使うことを認め、書類の保管場所を提供したのである⁴⁸⁾。

ハンブルクにおける協会活動は、愛国協会から発展した。愛国協会の思想的・行動的基盤は、自らの時間、労力、財産を公共のために使用することを美德と見なすハンブルク市民の伝統的な価値観であった。よって、ハンブルク市民の協会活動には、公共善への寄与を美德とする伝統的な市民的価値との繋がりが認められる。

1-2. 1830年代のハンブルク社会と市民

1830年代のハンブルクには、貧困層の増加を巡る社会問題の深刻化や信仰覚醒運動(Erweckungsbewegung)を背景に、貧民支援を目的とした協会や施設が、市民の有志によって相次いで設立された。信仰覚醒運動とは、19世紀初頭にプロテスタント内で生じた宗教生活の再生を目指す運動であるが、その一環として慈善活動も展開される⁴⁹⁾。

まず、ザンクトゲオルク(St. Georg)⁵⁰⁾の聖三位一体教会の牧師ヨハン・ヴィルヘルム・ラウテンベルク(Johann Wilhelm Rautenberg, 1791-1865)が、教育を通じて貧困家庭の子どもたちが置かれた状況を改善しようと、1825年に「日曜学校」(Sonntagsschule)を設立した。貧困層の子どもたちの教育は、貧困層が置かれた状況を改善するために重要な事柄の一つと見なされていた。貧困層の家庭では、大抵、子どもは家計を助けるための労働力とされており、親の教育への関心が低かった⁵¹⁾。そのため、貧困家庭で、学校教育や職業教育を受ける機会を得られずに育った子どもたちの中から、乞食や浮浪者、あるいは、非行や犯罪に走る者が多く現れていた⁵²⁾。そこで、ラウテンベルクは、貧困家庭の子どもたちに、週1回だけでも学校に通って読み方、書き方、宗教を学ぶ機会を設けたのである⁵³⁾。

1832年から1834年まで日曜学校の上級教師を務めていた神学者のヨハン・ヒーンリヒ・ヴィヒェルン(Johann Hinrich Wichern, 1808-1881)も、1833年、非行に走った青少年の矯正を目的とした施設「ラウエス・ハウス」(Rauhes Haus)を設立した⁵⁴⁾。ラウエス・ハウスを設立する際には、市参事会員マルティーン・ヒエローニムス・フートヴァルカー(Martin Hieronymus Hudtwalcker, 1787-1865)とジンディクス⁵⁵⁾のカール・ジーフェキング(Karl Sieveking, 1787-1847)の後ろ盾を得、また、商人たちから寄付金を募った⁵⁶⁾。

1831年10月から1832年2月にかけて、ハンブルクにコレラが流行した。その中で、故市参事会員の娘アマリエ・ジーフェキング(Amalie Sieveking, 1794-1859)は、自ら病院に足を運び、医師と看護婦の指導のもとで、

患者の看護に加わった⁵⁷⁾。そして彼女は、コレラの流行が収束した後、他の12人の女性たちとともに、「貧民及び病人扶助のための婦人協会」(Weiblicher Verein für Armen- und Krankenpflege)を設立した。この婦人協会は、毎週、貧民や病人の訪問を通じて、彼らの看護・支援活動を行った⁵⁸⁾。

下層民を支援するための施設としては、1830年に「保育所」(Warteschule)も設立されている。当時、ハンブルクの手工業者や労働者の家庭では、多くの場合、妻も家計を助けるために賃金労働に従事していた⁵⁹⁾。そこで、保育所が、愛国協会の会員でもあった市参事会員アマンドゥス・アウストゥス・アーベントロート(Amandus Augustus Abendroth, 1767-1842)の個人的な主導のもと、港湾労働、工場労働、手工業、露店商などに従事する共働きの労働者階級の家庭の2歳から6歳までの子どもたちを、昼間、両親が働きに出ている間、預かり、監督し、非行化するのを防ぐのを目的として設立されたのであった⁶⁰⁾。保育所は、1830年初頭に1校目が、同年11月に2校目が設立された後、1834年に3校目、1835年に4校目、1840年に5校目(ザンクトゲオルク)、1843年に6校目(ザンクトパウリ, St. Pauli)⁶¹⁾、1856年に7校目というように、ハンブルク市内およびその周辺に増設されていく⁶²⁾。特に、1830年から1835年の5年間に4校相次いで設立されたことが注目される。

以上のように、1830年代のハンブルクには、貧民及び病人扶助のための婦人協会、ラウエス・ハウス、保育所と、下層民の生活支援を目的とした慈善団体の設立が相次いでいた。それらは、ハンブルク市民の有志が、都市において深刻化していた貧困を巡る社会問題に対応するために、自発的に組織したものである。ここに、当時のハンブルク上層市民の地元の社会問題に対する関心、およびその改善に向けて自主的に行動を起こす意志が見える。

2. ハンブルク・ジングアカデミーと慈善

2-1. ジングアカデミーの「復活祭コンサート」

ハンブルク・ジングアカデミーは、1819年11月25日に、「宗教的な歌を共同で練習すること」を目的に掲げて⁶³⁾、「ハンブルク宗教歌愛好家協会」(Gesellschaft der Freunde religiösen Gesangs zu Hamburg)⁶⁴⁾という名称で設立された⁶⁵⁾。設立時点におけるジングアカデミーの会員数は71名(女性39, 男性32)であった⁶⁶⁾。会員の社会層については、音楽的能力を習得するために音楽のレッスンを受けられるのが経済的・時間的に余裕がある人々に限られることを踏まえれば⁶⁷⁾、ほぼ有産

市民に限定されていたと考えられる。

ジングアカデミーの練習は、毎年10月から翌年4月までの冬期に、毎週木曜日の午後7時から9時に行っていた⁶⁸⁾。練習については、会則で、「いつもいくつかのコーラルで始まる。それから、何か定評のある古いあるいは新しい宗教音楽を練習する」と定められていた⁶⁹⁾。ジングアカデミーの議事録に残されている1819年11月25日から1821年10月25日までの練習記録によると、練習では、ヨハン・ゴットフリート・シヒト(Johann Gottfried Schicht, 1753-1823)の賛美歌やモテット、フリードリヒ・ヴィルヘルム・グルント(Friedrich Wilhelm Grund, 1791-1874)やヨハン・フリードリヒ・シュヴェンケ(Johann Friedrich Schwencke, 1792-1852, 以下, J. F. シュヴェンケ)の賛歌、ヘンデル(Georg Friedrich Händel, 1685-1759)《詩編100番》等の宗教楽曲がよく取り上げられていた。それに加えて、カール・ハインリヒ・グラウン(Carl Heinrich Graun, 1704-1759)、ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(Johann Sebastian Bach, 1685-1750)、ヘンデル、ヨーゼフ・ハイドン(Joseph Haydn, 1732-1809)、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791)ら過去の音楽家だけでなく、シヒト、アンドレーアス・ロンベルク(Andreas Romberg, 1767-1821)、ジギスムント・フォン・ノイコム(Sigismund von Neukomm, 1778-1858)、フリードリヒ・シュナイダー(Friedrich Schneider, 1786-1853)ら同時代の音楽家の大きな宗教合唱曲、オラトリオやミサ曲も取り上げられていた。また、グルント、J. F. シュヴェンケと彼の弟カール・シュヴェンケ(Carl Schwencke, 1797-c.1870)など、ハンブルク出身の音楽家の作品も歌われている⁷⁰⁾。1835年以前は、公の場で演奏を披露する機会は、定期的には設けられていなかった⁷¹⁾。

ジングアカデミーが1835年から、毎年聖週間に、定期的に「復活祭コンサート」を開催するようになったきっかけは、1834年における会則の改定である⁷²⁾。会則を改定した際、「私的な演奏会」(Privataufführung)を毎年少なくとも2回、「公開の演奏会」(öffentliche Aufführung)を毎年聖週間に1回開くと定められた⁷³⁾。復活祭コンサートの会場となったのは、市の主要教会⁷⁴⁾である聖ペテロ教会や聖ミハエル教会である⁷⁵⁾。復活祭コンサートは公開で開催され、その開催趣意には、「慌ただしい物質的な経済生活によって芸術の振興がしばしば阻まれる我々の故郷の町において、古い及び新しい古典作品の定期的な上演を通じて⁷⁶⁾、教会音楽に対する感性をいっそう呼び覚まし、広める」⁷⁷⁾ことが掲げられた。

この公開の演奏会開催趣意から、ジングアカデミーが、復活祭コンサートにおける宗教音楽の演奏を通じて、人

びとの宗教心の涵養を目指していたことが読み取れる。また、「我々の故郷の町」という文言は、ジングアカデミーが、協会の活動基盤となる地元ハンブルク社会の公益への寄与を志向していたことを示していると言える。

ハンブルク・ジングアカデミーは、1835年に復活祭コンサートを始める以前は、自分たちの演奏を公の場で積極的に披露することはなく、その活動が協会内部にとどまっていたという意味において、「私的」に活動していた。ジングアカデミーが1835年から定期的に復活祭コンサートを開催するようになったことは、ジングアカデミーの活動がハンブルク社会と接点を持つようになったことを示している。

2-2. 「復活祭コンサート」と慈善

ハンブルク・ジングアカデミーは、1835年4月13日聖月曜日に最初の復活祭コンサートを開催した。そのコンサートで得た収益金は、保育所に寄付された。1835年の復活祭コンサートの収益金を保育所に寄付することは、演奏会の約1ヶ月前の3月8日に開かれた委員会と理事会の会合⁷⁸⁾で、保育所の幹部からの要請を受けて、あらかじめ決定していた⁷⁹⁾。保育所は、共働きの労働者階級の家庭の子どもたちを、昼間、両親が働きに出ている間、預かって世話をするための施設であるが、1830年から1835年までの5年間に、ハンブルクに相次いで4校も設立されている。保育所がジングアカデミーに演奏会の収益金の寄付を要請した背景には、短期間に保育所を増設したことにより、さらに多くの運営資金を調達する必要性が生じていたことが挙げられるであろう。

ジングアカデミーがそれ以後毎年聖週間に教会で行う公開の演奏会を慈善目的で行うことは、最初の復活祭コンサートを終えて半年後、1835年9月9日に開かれた委員会と理事会の会合において決定された⁸⁰⁾。復活祭コンサートの収益金の寄付先は、その都度、慈善団体からの要請も考慮して、委員会と理事会の話し合いによって決定されていた。

例えば、1840年4月13日聖月曜日に実施した復活祭コンサートの収益金は、最終的には、貧民及び病人扶助のための婦人協会に寄付されたが⁸¹⁾、非行青少年を更生するための教育施設「ラウエス・ハウス」も候補として上がっていた。ジングアカデミーは、コンサートを開催する7ヶ月前、1839年9月9日に委員会と理事会の会合を開く前までに、貧民及び病人扶助のための婦人協会とラウエス・ハウスからそれぞれ、1840年の聖週間のコンサートの収益金は自分たちに寄付してくれるよう書面で要請されていたのである⁸²⁾。しかし結局、1839年10月24日の会合で、貧民及び病人扶助のための婦人協会に寄付することに決定したのであった⁸³⁾。

だが、翌1841年4月5日聖月曜日に実施した復活祭

コンサートの収益金は、ラウエス・ハウスに寄付することとなる⁸⁴⁾。ラウエス・ハウスに寄付することに決定したのは、コンサートの前年、1840年11月16日に委員会と理事会の会合を開く前に、ラウエス・ハウスの管理委員会から、次の聖週間のコンサートの収益金は、自分たちに寄付してもらうことを極めて必要としているという旨の書簡が届いたからであった⁸⁵⁾。

ジングアカデミーが、慈善団体から演奏会の収益金を寄付してもらうよう要請されていた事実は、ジングアカデミーの復活祭コンサートが、慈善演奏会として、社会的に認知されていたことを示している。

復活祭コンサートの収益金は、ジングアカデミーの議事録と復活祭コンサートに関する市参事会の史料を分析した結果、1835年から1876年までは、主に、保育所もしくは貧民及び病人扶助のための婦人協会に寄付されていたことが明らかになった⁸⁶⁾。これは、ジングアカデミーが、保育所や貧民及び病人扶助のための婦人協会と密接な関係を有していたことを示している。

ジングアカデミーが復活祭コンサートの収益金を慈善のために寄付していたことに対して自負心を抱いていたことは、1844年のジングアカデミー創立25周年祭に際して、当時の書記エルンスト・ゴスラー (Dr. Ernst Gossler)⁸⁷⁾が行った演説において、1835年から1844年にかけての10年間で、合計30,645マルク15シリング6セントを慈善のために寄付したと言及されていることから明らかである⁸⁸⁾。ここに、ジングアカデミーの会員たちが富裕層として、自分たちの時間や労力を演奏会に参加するために注ぎ、その対価として得た収益金を低所得者層や貧困層の福祉のために捧げ、公益に奉仕したという意識が表れている。

以上のように、ジングアカデミーは、1835年以降、毎年、復活祭コンサートの開催を通じて、協会の外部に対して自分たちの活動成果を披露するようになった。復活祭コンサートを通じて得た収益金は、市民の有志によって組織された慈善団体、とりわけ保育所と貧民及び病人扶助のための婦人協会に寄付される。これらの慈善団体は、地元ハンブルクの貧困層の生活支援や教育に取り組んでいた。すなわち、復活祭コンサートには、ジングアカデミーにとって、日頃の練習成果を披露するだけでなく、社会の改善に寄与するという役割も備わっていたのである。

ジングアカデミーが1835年から始めた復活祭コンサートの主な寄付先となった2つの慈善団体、保育所と貧民及び病人扶助のための婦人協会が設立された年は、それぞれ1830年と1832年である。つまり、これらの慈善団体が設立されたのは、ジングアカデミーが復活祭コンサートを開始したのと同時期である。よって、ジングアカデミーによる復活祭コンサートの開始は、当時のハンブル

ク市民層の貧困層を巡る社会問題への関心を反映しているのではないかと考えられる。

おわりに

本稿は、ジングアカデミーの議事録およびジングアカデミーの公開の演奏会に関する市参事会と教会の史料をもとに、19世紀ハンブルクにおけるジングアカデミーの社会的役割やその活動の意義について、ジングアカデミーの「復活祭コンサート」に注目して検討した。そして、復活祭コンサートの実態を通じて、当時のハンブルク市民の社会に対する意識を明らかにしようと試みた。

まず、ハンブルク・ジングアカデミーの活動には、地元ハンブルク社会の公共善に寄与するという意識が見られた。それは、1835年に始まった復活祭コンサートの開催趣意に記されていた「我々の故郷の町において、古い及び新しい古典作品の定期的な上演を通じて、教会音楽に対する感性をいっそう呼び覚まし、広める」という文言が示している。ジングアカデミーのハンブルク社会との結びつきは、復活祭コンサートの収益金の大部分をハンブルクで慈善活動に取り組む団体、とりわけ保育所と貧民及び病人扶助のための婦人協会に寄付していたことにも表れている。

ジングアカデミーが復活祭コンサートを開始した1835年は、ハンブルクにおいて貧困を巡る社会問題が深刻化していた時期と重なる。ジングアカデミーは、復活祭コンサートの収益金を、主に、貧困層の生活支援や教育に取り組む団体、すなわち、保育所と貧民及び病人扶助のための婦人協会に寄付していた。保育所が設立されたのは1830年、貧民及び病人扶助のための婦人協会が設立されたのは1832年であり、それらは、いずれも市民の有志によって設立された。よって、ジングアカデミーの復活祭コンサートは、当時のハンブルク市民の間に生じていた貧困層の福祉への関心の高まりを反映して開催されるようになったのではないかと考えられる。

ジングアカデミーは、復活祭コンサートから得た収益金を地元の慈善団体に寄付し、その活動支援を通じて、地元ハンブルク社会の公共善の促進に努めた。慈善団体にとっては、ジングアカデミーの復活祭コンサートの収益金は、活動資金源の一つであった。それは、ジングアカデミーが復活祭コンサートを開催する度に、慈善団体から演奏会の収益金を寄付してもらうよう要請されていたことから明らかである。その意味において、ジングアカデミーは、慈善活動を支援する団体の一つとして、社会的に認知されていた。

ジングアカデミーと慈善団体相互の関係は、19世紀ハンブルク社会において、市民によって結成された様々

な組織が、互いに役割分担し、協力し合いながら、公共善の促進のために活動していた実態も示している。

ジングアカデミーの復活祭コンサートには、自分たちの余暇や労力を演奏会に参加するために注ぎ、演奏会によって得た収益金を低所得者層や貧困層の生活改善のために使用していたという意味において、ハンブルクの伝統的な市民的美徳である「パトリオティスムス」、すなわち、自分の時間、労力、財産を公共善の促進のために使用するという理念との関連性が見られる。公共善の促進は、18世紀から19世紀の様々な協会の活動理念としてしばしば掲げられていたものである。これらのことから、ジングアカデミーの活動には、ハンブルクの伝統的な市民的美徳との連続性および当時の協会活動の風潮との共通性が見られることは明らかである。

以上のように、ハンブルク・ジングアカデミーは、市で活動する様々な協会の一つとして、19世紀ハンブルクの社会的文脈の中で活動を展開し、音楽文化活動に取り組む一方で、社会的にも重要な役割を果たし、公共善の促進にも努めていた。合唱協会は、当時、ドイツ各地に設立されている。本稿で取り上げた都市はハンブルクであったが、今後、他都市の合唱協会の活動についても、各都市の社会的文脈の中で検討することにより、各都市の社会や文化を巡る状況が明らかになるであろう。さらに、各都市の合唱協会を、都市間で相互に比較することによって、都市ごとの合唱協会やそれを取り巻く社会状況の特徴が明らかになり、19世紀ドイツ都市社会史の文脈における合唱協会の社会的意義がより明確になると考えられる。

注

1. 本稿は、執筆者がお茶の水女子大学に提出した博士学位論文「都市と音楽—19世紀ハンブルクにおけるジングアカデミー—」（お茶の水女子大学博士学位論文、2013年）の一部を再構成し、加筆したものである。
2. 正式名称は「ハンブルクにおける技芸と有益な産業を振興するための協会」（Hamburgische Gesellschaft zur Beförderung der Künste und nützlichen Gewerbe）である。通称の「愛国協会」は、1724年から1748年までハンブルクに存在した「愛国協会」（Patriotische Gesellschaft）に由来する。会員には、詩人で市参事会員のバルトルト・ハインリヒ・ブローケス（Barthold Heinrich Brockes, 1680-1747）、アカデミー・ギムナジウムのギリシア語と歴史の教授ミハエル・リシャイ（Michael Richey, 1678-1761）、道徳と修辞学の教授ヨハン・アルベルト・ファブリーツィウス（Johann Albert Fabricius, 1668-1736）ら、市参事会員、学者、聖職者、ジャーナリスト、商人等、市の指導的地位にある人々が名を連ねていた。1724年から1726年にかけては、道徳的週刊誌『愛国者』（Der Patriot）の発行を通じて、市の公共善に関する意見を発信していた。だが、1748年に創立時の会員の死去やハンブルクからの退出に伴う会員の減少によって、解散した。1724年の愛国協会については以下を参照。Rathje, Jürgen, „Geschichte, Wesen und Öffentlichkeitswirkung der Patriotischen Gesellschaft von 1724 in Hamburg“, in: Vierhaus, Rudolf (Hg.),

- Deutsche patriotische und gemeinnützige Gesellschaften* (Wolfenbüttler Forschungen, herausgegeben von der Herzog August Bibliothek, Bd. 8). München: Kraus International Publications, 1980, S. 51-69.
3. Aaslestad, Katherine, *Place and Politics: Local Identity, Civic Culture, and German Nationalism in North Germany during the Revolutionary Era*. Leiden: Boston: Brill, 2005, pp. 20-21.
 4. 「愛国協会」については、以下の文献に詳しい。Kopitzsch, Franklin, „Die Hamburgische Gesellschaft zur Beförderung der Künste und nützlichen Gewerbe (Patriotische Gesellschaft von 1765) im Zeitalter der Aufklärung: Ein Überblick“, in: Vierhaus (1980), S. 71-118; Schambach, Sigrid, *Aus der Gegenwart die Zukunft gewinnen. Die Geschichte der Patriotischen Gesellschaft von 1765*. Hamburg: Ellert & Richter, 2004.
 5. Nipperdey, Thomas, „Verein als soziale Struktur in Deutschland im späten 18. und frühen 19. Jahrhundert“, in: Boockmann, Hartmut [u. a.], *Geschichtswissenschaft und Vereinswesen im 19. Jahrhundert: Beiträge zur Geschichte historischer Forschung in Deutschland*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1972, S. 1.
 6. Nipperdey (1972), S. 1-5. 例えば、農業協会、公益協会、読書協会、音楽協会、社交協会、慈善協会、芸術協会、コンサート協会、合唱協会、学術協会、工芸協会がある。
 7. ハンブルクは、1815年にドイツ連邦が成立した後も、プレーメン、リュューベク、フランクフルト・アム・マインと共に、自由都市として、他の34の君主国と同等の地位が認められ、引き続き、主権の独立性が承認された。以下を参照。Ahrens, Gerhard, „Von der Franzosenzeit bis zur Verabschiedung der neuen Verfassung 1806-1860“, in: Jochmann, Werner/Loose, Hans-Dieter (Hg.), *Hamburg: Geschichte der Stadt und ihrer Bewohner, Bd. 1. Von den Anfängen bis zur Reichsgründung*. Hamburg: Hoffmann und Campe, 1982, S. 430-431.
 8. ヴァイグル, エンゲルハルト (三島憲一・宮田敦子訳)『啓蒙の都市周遊』岩波書店, 1997年, 89-92頁。
 9. Hoffmann, Stefan-Ludwig, *Civil Society 1750-1914*. (Studies in European history) Palgrave Macmillan, 2006, p. 13-14. (ホフマン, シュテファン=ルートヴィヒ (山本秀行訳)『市民結社と民主主義 1750-1914』岩波書店, 2009年, 23-24頁); Freudenthal, Herbert, *Vereine in Hamburg. Ein Beitrag zur Geschichte und Volkskunde der Geselligkeit*. Hamburg: Museum für Hamburgische Geschichte, 1968, S. 58.
 10. Hoffmann (2006), p. 12. (ホフマン(2009), 21頁)
 11. Hoffmann (2006), p. 14. (ホフマン(2009), 23頁)
 12. Hoffmann (2006), p. 14. (ホフマン(2009), 24頁)
 13. ハンブルクには、1737年にドイツで最初のフリーメイソンの会所が設立された。ハンブルクの会所は、ロンドンの大会所の傘下に入っており、1740年に „Absalom zu den drei Nesseln“ という名称を得る。その後、ハンブルク周辺に、 „St. Georg zur grünenden Fichte“ をはじめ、次々と会所が設立されていった。以下を参照。Freudenthal (1968), S. 56-57.
 14. Freudenthal (1968), S. 57.
 15. 「ハーモニー」は、設立当初は、「学識者、公職に就いている者、商人、商人見習、株仲間人」の入会しか認めないと定め、定員を30名に設定し、欠員が出なければ新会員の入会を認めないという方針を示していた。しかし、入会希望者が殺到したため、1791年に会則を改訂し、「精神、心情、礼節を通して、我々の協会の目的を果たせる能力がある、あらゆる階層の人々」に入会資格を認めるようになった。以下を参照。Kopitzsch, Franklin, *Grundzüge einer Sozialgeschichte der Aufklärung in Hamburg und Altona* (Beiträge zur Geschichte Hamburgs, Bd. 21). Hamburg: Hans Christians Verlag, 1982, S. 569-571; Freudenthal (1968), S. 65-66, 457.
 16. 「救貧金庫」は、1793年に設置され、困窮した会員とその寡婦や子どもたちの扶養、将来有望な孤児の教育資金、有益で勤勉だが、支援が得られない労働者への奨学金、あらゆる階層の貧民の支援のために充てると定められた。以下を参照。Freudenthal (1968), S. 67-68.
 17. 「ハーモニー」は、1800年に会則で、入会条件として、入会金100マルク、そして毎年、年会費18マルクに加え、「救貧金庫」に3マルク、合計21マルク納めなければならないと定めた。以下を参照。Kopitzsch (1990), S. 571.
 18. Sittard, Josef, *Geschichte des Musik- und Concertwesens in Hamburg vom 14. Jahrhundert bis auf die Gegenwart*. Altona und Leipzig: Verlag von A. C. Reher, 1890. Reprografischer Nachdruck von Hildesheim; New York: Georg Olms Verlag, 1971, S. 111-113. 演奏会の詳細は不明であるが、会員でなくても入場できる開かれた催しであった。1777年2月23日の演奏会では、当時のハンブルクのカントル(任1768-1788)カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ(Carl Philipp Emanuel Bach, 1714-1788, 以下, C. P. E. バッハ)が指揮し、彼自身の《荒野のイスラエル人》, ヨハン・アードルフ・ハッセ(Johann Adolph Hasse, 1699-1783)《聖エレナ》等を演奏し、ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル(Georg Friedrich Händel, 1685-1759)《メサイア》の演奏で締めくくった。以下を参照。Sittard (1890), S. 112-113. また、1778年4月12日の演奏会では、ジンディクスでかつ作曲家でもあったヤーコブ・シューバック(Jacob Schuback, 1726-1784)が作詞・作曲したオラトリオ《エマウスの若者たち》が作曲家自身の指揮で演奏された後、《メサイア》が演奏された。以下を参照。Sittard (1890), S. 113.
 19. 井上登喜子「19世紀ドレーズデンの合唱協会研究—合唱活動のもつ社会的側面に関する考察—」(お茶の水女子大学学位論文) 2002年, 119頁。
 20. ドレーズデンでも19世紀を通じて、諸合唱協会によって、貧困層や孤児の救済、病院や施設の建設資金の援助、被災地の住民への支援等を目的とした、慈善目的の演奏会が行われていた。以下を参照。井上登喜子「合唱協会の演奏活動における市民的表現行動—19世紀ドレーズデンを例に—」『人間文化論叢』第5巻(2003), 46頁。
 21. Brusniak, Friedhelm, Artikel „Chor und Chormusik“, in: Blume, Friedrich (Begr.)/Finscher, Ludwig (Hg.), *Die Musik in Geschichte und Gegenwart: allgemeine Enzyklopädie der Musik (MGG) 2., neubearbeitete Ausg.* Sachteil 1-9, Personen- teil 1-17. Kassel: Bärenreiter; Stuttgart: Metzler, 1994-2008, Sachteil 2, Sp. 786. 19世紀ドイツにおける市民層と音楽の関係について論じた代表的な邦語文献としては、以下の文献が挙げられる。宮本直美『教養の歴史社会学—ドイツ市民社会と音楽』岩波書店, 2006年。同著第2章(79-140頁)では、アマチュアの合唱活動と市民層による教養の実践との関わりについて論じられている。
 22. „Plan für die Gesellschaft der Freunde religiösen Gesangs zu Hamburg 1819“, in: SUB Hamburg: SAH (詳細は註32を参照): 1 : A : *Protocoll des Gesang-Vereines A vom 25. 11. 1819 - 25. 11. 1844*, S. 1. ジングアアカデミーとは、混声合唱協会の一種である。1889年までのハンブルク・ジングアアカデミーの活動は、公開の演奏会で演奏された曲目を中心に、Sittard, Josef, *Geschichte des Musik- und Concertwesens in Hamburg vom 14. Jahrhundert bis auf die Gegenwart*. Altona und Leipzig: Verlag von A.

- C. Reher, 1890. *Reprografischer Nachdruck von Hildesheim*; New York: Georg Olms Verlag, 1971, S. 290-304 にまとめられている。尚、「ジングアカデミー」(Singakademie) と称する混声合唱協会は、1791年に「ベルリン・ジングアカデミー」が設立された後、1802年にライプツィヒ、1804年にシュテティーン、1807年にドレーズデン、1814年にハレ、1815年にブレーメン、1817年にケムニッツというように、ドイツ中部及び北部の諸都市に次々と設立された。以下を参照。Brusniak, Friedhelm, Artikel „Chor und Chormusik“, in: *MGG*, Sachteil 2, Sp. 786.
23. 19世紀後半の音楽著述家ヨーゼフ・ジッタート (Josef Sittard) は、ハンブルク・ジングアカデミーについて、自身の著書の中で「ハンブルクの音楽生活全体に対して、深く、永続的な影響力を持つようになった」と述べている。以下を参照。Sittard (1890), S. 290.
24. ジングアカデミーで毎年聖週間に行うコンサートは、1835年から1842年及び1850年から1863年までは復活祭前の聖月曜日に、1864年以降は、大抵、聖火曜日に開催されている。1843年から1849年までは、大火で焼失した聖ペテロ教会が使えず、代替会場となった聖ミハエル教会から聖週間に開催する許可が得られなかったため、開催日が復活祭後の木曜日に設定された (SUB Hamburg: SAH (詳細は註 32 を参照) : 1 : A : *Protocoll A*, S. 211)。それらのコンサートを指す呼称は、ジングアカデミーの議事録では、聖週間に開催するものであれ、復活祭後の週に開催するものであれ、すでに「復活祭コンサート」(Osterconcert) がよく用いられている。議事録には、その他、「宗教コンサート」(geistliches Concert) や「教会コンサート」(Kirchenconcert) としても言及されている (*Protocoll A; B*)。市参事会や教会の資料、及びコンサート前に新聞に掲載される「警察命令」(Polizei-Verfügungen) には、「宗教コンサート」という表現が多く用いられている。以下を参照。StAH (詳細は註 33 を参照), 111-1 Senat, Cl. 7 Lit. Hc No. 3 Vol. 17; No. 7 Vol. 22; Vol. 33; 512-2 St. Petrikirche, A. 14. c. 2. a; b.
25. 聖週間に行う公開の演奏会は、ジングアカデミーの創立 175 周年記念誌によると、戦争による中断を挟みながらも 1966 年まで、1 世紀以上に渡って続いた (SUB Hamburg: SAH : 2 : 2 : 12 : *175 Jahre Hamburger Singakademie, 1819-1994*)。ハンブルク・ジングアカデミーが公開の演奏会を開催するようになった経緯については、拙稿「19世紀前半におけるハンブルク・ジングアカデミーの活動について—公開の演奏会の開催に至るまでの経緯とその意義—」『人間文化創成科学論叢』第 14 巻 (2011), 19-27 頁を参照されたい。
26. ハンブルクは、ブラジル (1827), アメリカ合衆国 (1827), メキシコ (1832), ヴェネズエラ (1837), グアテマラ (1847), ハワイ (1848/51), コスタリカ (1848), ニューバグランド (コロンビア, 1854), ドミニカ共和国 (1855), リベリア (1855), ペルシア (1857), シヤム (タイ, 1858), ザンジバル (1859), 中国 (1861) と通商条約を締結した。以上の () 内は、ハンブルクが通商条約を締結した年である。以下を参照。Ahrens (1982), S. 446.
27. Ahrens (1982), S. 452.
28. Kraus, Antje, *Die Unterschichten Hamburgs in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts. Entstehung, Struktur, Lebensverhältnisse. Eine historisch-statistische Untersuchung*. Stuttgart, 1965, S. 46.
29. Ahrens (1982), S. 452-454.
30. Evans, Richard J., *Death in Hamburg: Society and Politics in the Cholera Years, 1830-1910*. Oxford: Clarendon Press, New York: Oxford University Press, 1987, p. 75. 「一般救貧施設」については 4 頁「1-1. 愛国協会とハンブルク」にて詳しく述べる。
31. 男声合唱運動に関する研究には、以下のものがある。松本彰「一九世紀ドイツにおける男声合唱運動—ドイツ合唱同盟成立(一八六二年)の過程を中心に」姫岡とし子他『近代ヨーロッパの探究① ジェンダー』ミネルヴァ書房, 2008 年, 111-161 頁。Unverhau, Henning, *Gesang, Feste und Politik. Deutsche Liedertafeln, Sängereisen, Volksfeste und Festmäler und ihre Bedeutung für das Entstehen eines nationalen und politischen Bewußtseins in Schleswig-Holstein 1840-1848*. Habil.-Schr. Univ. Kiel, 1994/95, Frankfurt/M: Peter Lang, 2000; Brusniak, Friedhelm/Klenke, Dietmar, „Sängereisen und die Musikpolitik der deutschen Nationalbewegung“, in: *Die Musikforschung* Jg. 52 (1999), H. 1., S. 29-54; Klenke, Dietmar, *Der singende „Deutscher Mann“*. *Gesangvereine und deutsches Nationalbewußtsein von Napoleon bis Hitler*. Münster, 1998; Hahn, Hans-Werner, „Die «Sängerrepublik» unter der Wartburg. Das Liederfest des Thüringer Sängerbundes in Eisenach im August 1847 als Beitrag zur kulturellen Nationsbildung“, in: Hein, Dieter/Schulz, Andreas (Hg.), *Bürgerkultur im 19. Jahrhundert. Bildung, Kunst und Lebenswelt*. München: C. H. Beck, 1996, S. 191-211; Brusniak, Friedhelm / Klenke, Dietmar (Hg.), „Heil deutschen Wort und Sang!“ *Nationalidentität und Gesangkultur in der deutschen Geschichte - Tagungsbericht Feuchtwangen 1994*. Augsburg, 1995; Düding, Dieter, „Nationale Oppositionsfeste der Turner, Sängereisen und Schützen im 19. Jahrhundert“, in: Düding, Dieter/Friedemann, Peter/Münch, Paul (Hg.), *Öffentliche Festkultur. Politische Feste in Deutschland von der Aufklärung bis zum Ersten Weltkrieg*. Hamburg: Reinbek, 1988, S. 166-190; Düding, Dieter, *Organisierter gesellschaftlicher Nationalismus in Deutschland (1808-1847). Bedeutung und Funktion der Turner- und Sängereisen für die deutsche Nationalbewegung*. München, 1984.
32. 1819 年から 1844 年については Staats- und Universitätsbibliothek Hamburg Carl von Ossietzky (以下 SUB Hamburg と略): Singakademie Hamburg (以下 SAH と略) : 1 : A : *Protocoll des Gesang-Vereines A vom 25. 11. 1819 - 25. 11. 1844*, 1844 年から 1894 年については SUB Hamburg: SAH : 1 : B : *Protocoll des Gesang-Vereines B, vom 11. 12. 1844 - 24. 11. 1894* に記録されている。
33. 聖ペテロ教会で開催した演奏会に関しては Staatsarchiv Hamburg (以下 StAH と略), 111-1 Senat, Cl. 7 Lit. Hc No. 3 Vol. 17 (1817, 1822-1842, 1851, 1852 年, 聖ペテロ教会における宗教音楽の演奏); StAH, 512-2 St. Petrikirche, A. 14. c. 2. a (1836-1842 年, ジングアカデミーの宗教コンサート); A. 14. c. 2. b (1850-1861, 1863 年, ジングアカデミーの宗教コンサート), 聖ミハエル教会で開催した演奏会に関しては StAH, 111-1 Senat, Cl. 7 Lit. Hc No. 7 Vol. 22 (1860-1865 年, 聖ミハエル教会における宗教コンサートの許可); Vol. 33 (1866-1870 (1871) 年, 聖ミハエル教会における宗教コンサートの許可) がある。
34. ハンブルクには、1823 年には男声合唱協会「リーダーターフェル」(Liedertafel) が、1840 年には混声合唱協会「ツェツィーリア協会」(Cäcilienverein) も設立されているが、議事録は残っていない。Sittard (1890), S. 339-356 (ツェツィーリア協会); Todt, Hartwig, „Liedertafel“, in: Kopitzsch, Franklin/Tilgner, Daniel (Hg.), *Hamburg Lexikon*. Hamburg: Zeise, 2000, S. 303-304 (リーダーターフェル)。また、ハンブルクに設立された協会については、ヘルベルト・フロイデンタールが、17 世紀から 20 世紀前半まで、人類学的な手法で、網羅的に調査している。Freudenthal, Herbert, *Vereine in Hamburg. Ein Beitrag zur Geschichte und Volkskunde der Geselligkeit*. Hamburg: Museum für Ham-

- burgische Geschichte, 1968.
35. 市参事会は、市長 (Bürgermeister) 4名と市参事会員 (Senator) 24名、合計28名で構成され、議席は、商人と法律家に半分ずつ割り当てられ、市長1名と市参事会員13名は商人、市長3名と市参事会員11名は法律家と定められる。市長と市参事会員は終身制であり、欠員が出たら、自分たちで新しい成員を選んで補充した。以下を参照。Kopitzsch (1990), S. 154-156.
36. Borowsky, Peter, „Die Restauration der Verfassungen in Hamburg und in den anderen Hansestädten nach 1813“, in: Herzig, Arno (Hg.), *Das alte Hamburg (1500-1848/49): Vergleiche • Beziehungen*. Berlin: Hamburg: Dietrich Reimer Verlag, 1989, S. 155.
37. Kopitzsch (1980), S. 78. 設立の中心となったのは、アカデミー・ギムナジウムのヘブライ語教授で合理主義神学者のヘルマン・ザームエル・ライマールス (Hermann Samuel Reimarus, 1694-1768) である。設立初年度には96名入会したが、会員には例えば、ライマールスの息子で医師のヨハン・アルベルト・ハインリヒ・ライマールス (Johann Albert Heinrich Reimarus, 1729-1814)、建築家のエルンスト・ゲオルク・ゾニン (Ernst Georg Sonnin, 1713-1794)、ギムナジウムの数学教授で、1768年に商人の実践的・専門的な育成を目的とする商業アカデミーを設立したヨハン・ゲオルク・ビュッシュ (Johann Georg Büsch, 1728-1800) がいた。1789年には、会則を改定し、商人や学者だけでなく、商工業者を含め、より幅広い階層に協会の門戸を広げた。その結果、会員数は、1795年時点で380名、1798年時点で420名、1799年時点で450名、1803年時点で550名に達し、ハンブルク最大の協会となった。以下を参照。Kopitzsch (1980), S. 83-85.
38. Aaslestad (2005), pp. 20-21.
39. Aaslestad (2005), pp. 41-45.
40. Schambach (2004), S. 33-34. 愛国協会が設立された当時、ハンブルクの住民の間では、市外、とりわけ、工業化が進むイングランドで製作された良質な手工業製品が好まれ、地元の手工業製品は、市外から流入した製品に対抗することができなくなっていた。ハンブルクの富裕な住民は、家具を購入する際、地元の家具職人が製作した品物よりも、イングランドからの輸入品を好んでいた。
41. Schambach (2004), S. 33-34.
42. Schambach (2004), S. 35.
43. Schambach (2004), S. 42-43. 一般積み立て基金は、ハンブルクがフランスの占領下にあった1810年に消滅したが、1827年に設立された「ハンブルク貯蓄銀行」(Hamburger Sparkasse) の前身となった。
44. 一般救貧施設は、私的な主導で設立されたが、運営組織の少なくとも5席は市参事会の成員のために確保されており、市参事会もその運営に関わっていた。運営のための経費については、市参事会も助成金を支給していたが、大半は私人による寄付で賄うことが目指された。一般救貧施設の収入は、1789年には80%以上が私人による寄付で占められていた。しかし、時代が下るにつれて政府機関であると見なされるようになり、私人による寄付の割合は減少し、1830年代前半には20%程度にまで減った。市民が一般救貧施設に寄付する意欲が衰退した要因には、労働する気のない、援助に値しない貧民を世話していると見られるようになったことも挙げられる。以下を参照。Evans (1987), pp. 74-75.
45. 一般救貧施設の救貧事業は、地区ごとに分けて行われ、市全体で180人いる名誉職の救貧委員 (Armenpfleger) が、各自に割り当てられた貧民を最低6ヶ月に1回は訪ね、必要な支援を与えるだけでなく、規則正しく生活しているかどうか、監視した。以下を参照。Kraus (1965), S. 47.
46. Schambach (2004), S. 47-49; Evans (1987), p. 75.
47. Kopitzsch (1982), S. 594. 貧民のための協会が1830年代にも活動を続けていたことは、一般救貧施設の史料から確認されている。
48. Schambach (2004), S. 79.
49. Ahrens (1982), S. 452-454.
50. ハンブルクの市壁外北東部に位置する地区。
51. Lahrnsen, Ingrid, *Zwischen Erweckung und Rationalismus. Hudtwalcker und sein Kreis*. Hamburg: Friedrich Wittig Verlag, 1959, S. 70.
52. Kraus (1965), S. 50.
53. Lahrnsen (1959), S. 69-70; Daur, Georg, *Von Predigern und Bürgern. Eine hamburgische Kirchengeschichte von der Reformation bis zur Gegenwart*. Hamburg: Agentur des Rauhen Hauses, 1970, S. 195-196; Bohl, Regina, „Die Sonntagsschule in der Hamburger Vorstadt St. Georg (1825-1853)“, in: *Zeitschrift des Vereins für Hamburgische Geschichte* 67 (1981), S. 134, 137-140, 148-150. 日曜学校には、ラウテンベルク以外にも、聖職候補生、教師、商人、手工業者が教師として関わり、生徒の家庭訪問を通じて、その親にも影響を与えようと試みられた。以下を参照。Lahrnsen (1959), S. 69-70.
54. Lahrnsen (1959), S. 70.
55. ジンディクスとは、いわば、都市の文書官、公文書保管係、公証人、外交使節を合わせた職務で、公文書の記録、契約書の作成、法律事務、証書類の管理、私法に関する事柄の公証、外交を担っていた。以下を参照。Hundt, Michael, Artikel „Syndicus“, in: *Hamburg Lexikon*, S. 481.
56. Ahrens (1982), S. 454; Bohl (1981), S. 162-164.
57. Mager, Inge, „Weibliche Theologie im Horizont der Hamburger Erweckung: Amalie Sieveking (1794-1859) und Elise Averdieck (1808-1907)“, in: Steiger, Johann Anselm (Hg.), *500 Jahre Theologie in Hamburg: Hamburg als Zentrum christlicher Theologie und Kultur zwischen Tradition und Zukunft; mit einem Verzeichnis sämtlicher Promotionen der Theologischen Fakultät Hamburg*. Berlin [u.a.]: de Gruyter, 2005, S. 195; Freudenthal (1968), S. 99, 176.
58. Lahrnsen (1959), S. 115. ジーフエキングの婦人協会の活動はハンブルク周辺地域にも広まり、同名の協会が、フォアシュタット (Vorstadt) のザンクトゲオルクにも1835年、隣接都市アルトナにも1836年に設立された。以下を参照。Freudenthal (1968), S. 100. フォアシュタットは、ハンブルクの市壁外領域に位置する地区で、その住民には、市壁内の住民と同等に市民権が付与された。1830年には市壁外北東部に位置する「ザンクトゲオルク」(St. Georg) が、1833年には市壁外西部に位置する「ザンクトパウリ」(St. Pauli, 旧称は「ハンブルガーベルク Hamburger Berg」) がフォアシュタットに昇格した。以下を参照。Husen, Sebastian, Artikel „Landgebiet“, in: *Hamburg Lexikon*, S. 296.
59. Kraus (1965), S. 77.
60. *Hamburgisches Adress-Buch für das Jahr 1831*, S. 662. 現場における子どもたちの監督と世話は、市民層の女性たちが無給で引き受けていた。以下を参照。Tilgner, Daniel, *Amandus Augustus Abendroth*. Hamburg: Ellert & Richter Verlag, 2006, S. 119.
61. ハンブルクの市壁外西部に位置する地区。
62. *Hamburgisches Adress-Buch für das Jahr 1831*, S. 662-663; *für das Jahr 1845*, S. 481; *für das Jahr 1857*, S. 305.
63. „Plan für die Gesellschaft der Freunde religiösen Gesangs zu Hamburg 1819“, in: SUB Hamburg: SAH : 1 : A : *Protocoll A*, S. 2. 会則第1条には、「ハンブルクにおいても近年、いわゆる厳格な様式の音楽作品に対する好みは、再び生じ始めている。しかし、これまでに設立された合唱協会は、それ (厳格な様式の音楽作品一執筆者が補足) のみに取り組んでいるというわけではない

- か、あるいはこの町に大勢いる全ての音楽愛好家と音楽家に入会が許されているわけではなかった。従って、次第に増大して行く要請に応じて、当地の二人の音楽家が、ドイツの他の大きな都市の例に倣って、宗教的な歌を共同で練習することのみを目的とする音楽協会を設立することになった（下線部は執筆による）と記されている。条文で言及されている「二人の音楽家」とは、フリードリヒ・ヴィルヘルム・グルント（Friedrich Wilhelm Grund, 1791-1874）とヤーコプ・シュタインフェルト（Jacob Steinfeldt, 1788-1869）のことである。
64. „Plan 1819“, in: SUB Hamburg: SAH : 1 : A : *Protocoll A*, S. 1. ジングアカデミーは、議事録では、当初、「合唱協会」（Gesang-Verein）と自称し、1844年から「ジングアカデミー」（Sing-Akademie）と名乗っている。市参事会の公文書では、設立者のグルントに因んで「グルントの合唱協会」（Grundscher Gesangverein）、1851年からは「グルントのジングアカデミー」（Grundscher Sing-Akademie）と称されている（StAH, 512-2 St. Petrikirche, A. 14. c. 2. a; b.）。ハンブルクの住所録 *Hamburgisches Address-Buch* には、1821年から1829年までは「合唱協会」として、1830年になって初めて「宗教歌愛好家協会」として掲載されている。現在も「ハンブルク・ジングアカデミー」（Hamburger Singakademie）という名称で存続している。
65. SUB Hamburg: SAH : 1 : A : *Protocoll A*, S. 1. ジングアカデミーの設立を進めたのは、2人の音楽家、グルントとシュタインフェルト、及び「定評ある音楽の愛好家・後援者」のヨハン・フリードリヒ・キルヒナー（Johann Friedrich Kirchner）、アウグスト・ゲオルク・フリードリヒ・クンハルト（Dr. med. August Georg Friedrich Kunhardt）、ダーニエル・シュトックフレート（Daniel Stockfleth）、カール・トゥルマー（Dr. Carl Trummer）、コンラート・A・アウフムオルト（Conrad A. Auffm'Ordt）である。ハンブルクの住所録 *Hamburgisches Adress-Buch* によると、グルントは音楽教師（1820, S. 127）、シュタインフェルトは音楽教師（1819, S. 367）、キルヒナーは商人（1819, S. 185）、クンハルトは産科医（1819, S. 205）、シュトックフレートは商人・軍人（1820, S. 368. 1841年以降「大佐 Oberst」の肩書きが付く）、トゥルマーは弁護士（1820, S. 383）、アウフムオルトは商人（1820, S. 14）であった。（）内は、住所録に情報が掲載されていた年と頁である。
66. „Liste der erwählten Mitglieder“, in: SUB Hamburg: SAH : 1 : A : *Protocoll A*, S. 11-13. 会員名簿には、市参事会員（Senator）、牧師（Pastor）、博士（Dr.）等を除いて、会員一人一人の身分や職業は記載されていない。
67. Evans (1987), p. 51; Kraus (1965), S. 75-76. 19世紀前半のハンブルクにおいて、妻が賃労働に従事しなくても経済的に豊かな生活を送れた住民は、全体の20パーセント程度であったと見られる。ジングアカデミーの175周年記念誌は、初期のジングアカデミー会員で、市の名家に数えられる姓として、例えば、設立時の会員名簿に掲載されているドゥ・シャポールージュ（de Chapeaurouge）、メンケベルク（Mönckeberg）、シュリュター（Schlüter）、シュミリンスキー（Schmilinsky）、ベネケ（Benecke）、ゴスラー（Goßler）、ルッテロート（Lutteroth）に言及している。以下を参照。SUB Hamburg: SAH : 2 : 2 : 12 : *175 Jahre Hamburger Singakademie, 1819-1994*. また、ジングアカデミーの練習は、日照時間の短い冬の夜7時から9時に行われる。従って、自宅と練習場所の間の夜道の往復には、馬車が利用される。馬車を所有できるのが富裕層のみであったことを踏まえれば、ジングアカデミーの会員は、主に、市の上層市民層によって構成されていたと考えられる。参考までに、ベルリン・ジングアカデミーの会員であったリリー・パルタイ（Lili Parthey, 1800-1829、ベルリンにおける啓蒙の中心的人物で、書籍商フリードリヒ・ニコライ（Friedrich Nicolai, 1733-1811）の孫）が残した日記に、冬期に、女性を「アカデミーの馬車」（Akademiewagen）で、自宅と練習場所の間を送り迎える習慣が確立していたことが記されている。以下を参照。Auerbach-Schröder, Cornelia, „Frauen in der Geschichte der Sing-Akademie“, in: Bollert, Werner (Hg.), *Sing-Akademie zu Berlin. Festschrift zum 175 jährigen Bestehen*. Berlin: Rembrandt Verlag, 1966, S. 101.
68. SUB Hamburg: SAH : 1 : A : *Protocoll A*, S. 9, 27. 練習会場は、ハンブルク市民の邸宅を借りていた。当初は芸術・工芸品の仲買人ノット（Noodt）氏の邸宅で、1822年5月以降は楽譜商ペーメ（Böhme）氏の邸宅で行っていた（*ibid.*, S. 50）。1841年9月に、ペーメ氏から、賃料の値上げのために解約を通告されて以降は、頻繁に練習場所を変えている（*ibid.*, S. 153）。1822/23年度からは、練習日を毎週月曜日に変更する（*ibid.*, S. 51）。
69. „Plan 1819“, in: SUB Hamburg: SAH : 1 : A : *Protocoll A*, S. 9.
70. SUB Hamburg: SAH : 1 : A : *Protocoll A*, S. 14-23, 25-32, 34-35, 39-49.
71. 「公開の演奏会」とは、主に市の主要教会で、一般聴衆に演奏を披露するために開く演奏会である。公開の演奏会は、1835年以前にも、不定期ながら開催されていたが、それらは主に、特定の個人を支援する資金集めのためのものであった。ジングアカデミーが初めて公開の演奏会を開催したのは、1823年である。その年は、アポロホールで2回、その内1つはフリーメイソン病院の依頼を受けて（SUB Hamburg: SAH : 1 : A : *Protocoll A*, S. 52, 204）、もう1つはチェロ奏者で作曲家のベルンハルト・ロンベルク（Bernhard Romberg, 1767-1841）の依頼で、彼の従兄弟で、ゴータで宮廷楽長を務めていたアンドレアス・ロンベルクの遺族を支援するために行った（SUB Hamburg: SAH : 1 : A : *Protocoll A*, S. 53, 204）。ちなみに、フリーメイソン病院は、1800年に「公益のための施設」（gemeinnützige Anstalt）として建設されたものである（Freudenthal (1968), S. 58）。1823年11月17日と19日には、聖ミハエル教会で、「大規模な公開の音楽祭」を開催した。その音楽祭には、ジングアカデミーの会員以外の音楽家や音楽愛好家も参加し、収益金の3分の1は聖ミハエル教会に、3分の1は聖ミハエル教会を通じて病院に、3分の1は孤児院に寄付された（SUB Hamburg: SAH : 1 : A : *Protocoll A*, S. 54-57, 204）。グルント《イエスの復活と昇天》（Die Auferstehung und Himmelfahrt Jesu）とヘンデル《ユダス・マカベウス》を上演した。1825年4月11日にもアポロホールで、ハンブルクのカントル兼音楽監督クリスティアン・フリードリヒ・ゴットリーブ・シュヴェンケ（Christian Friedrich Gottlieb Schwencke, 1767-1822, 任1789-1822, 以下, C. F. G. シュヴェンケ）の死後に残された未成年の子どもたちを支援するために演奏会を開催した。これは、その子どもたちの叔父で後見人のクラリネット奏者ハルトマン（Hartmann）の依頼に応じて開催されたものであった（SUB Hamburg: SAH : 1 : A : *Protocoll A*, S. 62-70, 72, 205-206. C. F. G. シュヴェンケ《我らの父よ》とヘンデル《アレクサンダーの饗宴》を上演した）。尚、C. F. G. シュヴェンケは、J. F. シュヴェンケとカール・シュヴェンケの実父である。1827年2月27日には音楽監督グルントのために、翌1828年にはもう一人の音楽監督シュタインフェルトのために演奏会を開催している。これらの演奏会の収益金はそれぞれ、各音楽監督個人に渡された（SUB Hamburg: SAH : 1 : A : *Protocoll A*, S. 74-75, 77）。
72. 会則を改定した背景には、練習出席率の低下に表れた会員の練習意欲の低下、およびそれに対処するために運営組織が罰金を導入したことの賛否を巡る内部対立であった。1834年の会則改定経緯については、拙稿（2011）21-22頁を参照されたい。
73. SUB Hamburg: SAH : 1 : A : *Protocoll A*, S. 209-210. 「私的

な演奏会」とは、ジングアカデミーの練習場所で、会員の「ごく近い親類」のみを招待して開く演奏会で、実質的には1822年から行われていた。以下を参照。SUB Hamburg: SAH: 1: A: *Protocoll A*, S. 53. に対して、「公開の演奏会」とは、主に市の主要教会で、一般聴衆に演奏を披露するために開く演奏会である。

74. 主要教会とは、教区を形成する核となる教会である。ハンブルクには、聖ペテロ、聖ニコラウス、聖カタリーナ、聖ヤーコフ、聖ミヒャエルの5つの主要教会があった。以下を参照。Bergemann, Hans Georg, *Staat und Kirche in Hamburg während des 19. Jahrhunderts* (Arbeiten zur Kirchengeschichte Hamburgs, Bd. 1). Hamburg: Friedrich Wittig, 1958, S. 20; Loose, Hans-Dieter, „Das Zeitalter der Bürgerunruhen und der großen europäischen Kriege 1618-1712“, in: Jochmann, Werner/Loose, Hans-Dieter (Hg.), *Hamburg: Geschichte der Stadt und ihrer Bewohner, Bd. 1. Von den Anfängen bis zur Reichsgründung*. Hamburg: Hoffmann und Campe, 1982, S. 277-278.
75. 1835年から1842年までは聖ペテロ教会で開催している。1842年のハンブルク大火で聖ペテロ教会が焼失した後は、1843年から1849年まで、聖ミヒャエル教会に会場を移して開催する。1850年から1861年まで、及び1863年は聖ペテロ教会で、1864年は聖ニコラウス教会で開催した。1862年、及び1865年以降は聖ミヒャエル教会で開催している。
76. 復活祭コンサートでは、オラトリオ、ミサ曲、モテット、コラール等の宗教音楽が演奏された。1835年から1889年までの復活祭コンサートでは、以下の作品が演奏されたことが判明している。1835年：シュポーア《四終》、1836年：ヘンデル《メサイア》、1837年：ヘンデル《イエフタ》、1838年：メンデルスゾーン《パウルス》、1839年：グラウン《イエスの死》、1840年：モーツァルト《レクイエム》、ヘンデル《メサイア》第二部、1841年：ハイドン《十字架上のキリストの最後の7つの言葉》、バッハ《マタイ受難曲》よりレチタティーヴォと終合唱、1842年：J. S. バッハのモテット《イエスよ、私はあなたを見捨てない》、グラウン《イエスの死》より合唱「敬虔なる者よ、皆、喜べ」とコラール「新しい世界の何と素晴らしきことか」、メンデルスゾーン《賛歌》、1843年：メンデルスゾーン《パウルス》、1844年：グルント《イエスの復活と昇天》、1845年：ヘンデル《ユダス・マカベウス》、1846年：F. ヒラー《イェルサレムの破壊》、1847年：ベートーヴェン《ミサ曲ハ長調》、ヘンデル《メサイア》より「私は知っている、私をあがなう者は生きておられることを」と「ハレルヤ」、1848年：メンデルスゾーン《エアラス》(シュレースヴィヒ=ホルシュタイン戦争(1848-1851)勃発の影響で中止)、1849年：メンデルスゾーン《パウルス》、1850年：グラウン《イエスの死》、1851年：バッハ《マタイ受難曲》より独唱と合唱、バッハ無伴奏の8声のモテット、ヘンデル《メサイア》よりソプラノ・アリア、モーツァルト《レクイエム》より「レコルダレ」、[サンクトゥス]、「ベネディクトゥス」、ヘンデル《イエフタ》第二部の終合唱、ベートーヴェン《オリブ山上のキリスト》、1852年：ベートーヴェン《ミサ曲ハ長調》、バッハ《マタイ受難曲》よりアリアと合唱、ヘンデル《メサイア》よりソプラノ・アリア、モーツァルトの賛歌、1853年：ヘンデル《メサイア》、1854年：メンデルスゾーン《パウルス》、1855年：メンデルスゾーン《エアラス》、1856年：ヘンデル《メサイア》、1857年：メンデルスゾーン《パウルス》、1858年：モーツァルト《レクイエム》、ヘンデル《メサイア》第二部、1859年：ヘンデル《ユダス・マカベウス》、1860年：グルント《イエスの復活と昇天》、1861年：ベートーヴェン《ミサ曲ハ長調》、モーツァルト《悔悟するダヴィデ》、1862年：バッハ《マタイ受難曲》、1863年：メンデルスゾーン《パウルス》、1864年：バッハのカンタータ《喜べ、救われし群

れよ》、《目覚めよと呼ぶ声あり》、及び《キリストは死の絆につきたまえり》、メンデルスゾーンのカンタータ《賛美せよ、しもべたちよ》、ヘンデル《メサイア》よりレチタティーヴォとアリア、メンデルスゾーンの声のためのモテット《彼は良き羊飼ひ》、デュランテ《ミゼリコルディアス・ドミニ》、コルティ《アドラムス・テ・クリステ》、ヘンデルの戴冠式アンセム《祭司ザドク》、1865年：バッハ《ヨハネ受難曲》、1866年：バッハ《ヨハネ受難曲》、1867年：バッハ《マタイ受難曲》、1868年：バッハ《マタイ受難曲》、1869年：ブラームス《ドイツ・レクイエム》、バッハのカンタータ《我らのもとにとどまりたまえ、はや夕べとなれば》、1870年：バッハ《マタイ受難曲》、1871年：バッハ《マタイ受難曲》、1872年：ブラームス《ドイツ・レクイエム》、マイナルドゥスの受難歌曲、1873年：バッハ《マタイ受難曲》、1874年：ヘンデル《ユダス・マカベウス》、1875年：バッハ《マタイ受難曲》、1876年：マイナルドゥス《ヴォルムスのルター》、1877年：バッハ《マタイ受難曲》、1878年：ヘンデル《メサイア》、1879年：バッハ《マタイ受難曲》、1880年：バッハ《ミサ曲短調》、1881年：ヘンデル《メサイア》、1882年：バッハ《マタイ受難曲》、1883年：ヘンデル《ユダス・マカベウス》、1884年：バッハ《マタイ受難曲》、1885年：ハイドン《十字架上のキリストの最後の7つの言葉》より弦楽オーケストラのためのアダージョ、四重唱および合唱、カイザー《マルコ受難曲》よりソプラノ・アリア「ああ、ゴルゴタ」、ヘンデルのオラトリオ《メサイア》よりバスのためのレチタティーヴォとアリア「見よ、暗きは地を覆い」、コラール《血潮したたる主の御頭》、モーツァルト《レクイエム》、1886年：バッハ《マタイ受難曲》、1887年：ヘンデル《メサイア》、1888年：バッハ《マタイ受難曲》、1889年：バッハ《ミサ曲短調》。以下の史料に基づいて整理した。SUB Hamburg: SAH: 1: A: *Protocoll A*; B: *Protocoll B*; StAH, 111-1 Senat, Cl. 7 Lit. He No. 7 Vol. 33.

77. SUB Hamburg: SAH: 1: A: *Protocoll A*, S. 209-210.
78. 1834年の会則改定以降のジングアカデミーの運営組織は、音楽監督、書記、会計係の各1名、合計3名で構成される委員会と、ソプラノ、アルト、テノール、バスの各パートから1名ずつ選ばれ、合計4名で、女性2名と男性2名で構成される理事会から成り立っていた。議事録には、ジングアカデミーの運営組織の会合は、「委員会と理事会の会合」と記されている。詳しくは、拙稿(2011) 22頁を参照されたい。
79. SUB Hamburg: SAH: 1: A: *Protocoll A*, S. 104-105. シュポーア《四終》(Die letzten Dinge)を上演した。
80. SUB Hamburg: SAH: 1: A: *Protocoll A*, S. 107.
81. SUB Hamburg: SAH: 1: A: *Protocoll A*, S. 142. 聖ペテロ教会で開催し、モーツァルト《レクイエム》とヘンデル《メサイア》第二部を演奏した。
82. SUB Hamburg: SAH: 1: A: *Protocoll A*, S. 137.
83. SUB Hamburg: SAH: 1: A: *Protocoll A*, S. 139.
84. SUB Hamburg: SAH: 1: A: *Protocoll A*, S. 151. 聖ペテロ教会で開催し、J. ハイドン《十字架上のキリストの最後の7つの言葉》、及びバッハ《マタイ受難曲》よりレチタティーヴォと終合唱を演奏した。入場券は1,802枚売れる。収入はテキスト840部の売り上げと合わせて3,829マルクとなり、経費(詳細不明)を差し引いて残った2,029マルク3シリングを寄付した。1マルクは16シリングに相当する。例えば、19世紀前半における5人家族の1週間分の食費が5マルク6½シリングであったとされる。以下を参照。Kraus (1965), S. 61.
85. SUB Hamburg: SAH: 1: A: *Protocoll A*, S. 149.
86. 復活祭コンサートの収益金は、1835年から1889年までは以下の団体に寄付されたことが判明している。1835年：保育所(以下Wと略)、1836年：貧民及び病人扶助のための婦人協会(以下A

と略)と困窮者のための貸付金庫, 1837年: W, 1838年: A, 1839年: W, 1840年: A, 1841年: ラウエス・ハウス (以下Rと略), 1842年: A, 1843年: W, 1844年: 1842年のハンブルク大火で焼失した聖ペテロ教会と聖ニコラウス教会, 1845年: W, 1846年: AとR, 1847年: W, 1848年: A (シュレースヴィヒ=ホルシュタイン戦争(1848-1851)勃発の影響で中止), 1849年: A, 1850年: W, 1851年: A, 1852年: W, 1853年: A, 1854年: 聖ペテロ教会内部の装飾, 1855年: W, 1856年: A, 1857年: W, 1858年: W, 1859年: W, 1860年: W, 1861年: W, 1862年: 聖ヤコブ教会とW, 1863年: W, 1864年: W, 1865年: W, 1866年: A, 1867年: A, 1868年: A, 1869年: Aの小児病院, 1870年: W, 1871年: W, 1872年: W, 1873年: W, 1874年: W, 1875年: W, 1876年: W。1877年以降は, 1889年まで一貫して, 「貧民支援のための女性協会」(Frauenverein zur Unterstützung der Armenpflege)に寄付していた。貧民支援のための女性協会は, 1849年に, シャルロッテ・パウルゼン(Charlotte Paulsen, 1797-1862)とエミーリエ・ヴューステンフェルト(Emilie Wüstenfeld, 1817-1874)によって設立された, 女性だけから成る協会である。それは, 1848年革命期の女性の社会的地位改善を求める動きの中で結成され, 働く母親が子どもを預けるた

めの児童養育施設および協会が運営する学校(Vereinsschule)を設立する等, 教育活動を通じて, 貧困層の支援活動に取り組んでいた。以下を参照。Grolle, Ingeborg, „Demokratie ohne Frauen?“, in: Stephan, Inge/Winter, Hans-Gerd (Hg.), „Heil über dir, Hammonia“: Hamburg im 19. Jahrhundert. Kultur, Geschichte, Politik. Hamburg: Dölling u. Galitz, 1992, S. 336; Freudenthal (1968), S. 179。ジングアカデミーが演奏会を通じて得た収益金の寄付先は, 以下の史料に基づいて整理した。SUB Hamburg: SAH: 1: A: *Protocoll A*; B: *Protocoll B*; StAH, 111-1 Senat, Cl. 7 Lit. He No. 7 Vol. 33.

87. エルンスト・ゴスラーは, 1823年にジングアカデミーに入会し, 1827年に大学進学のために退会したが, 1832年に再入会する。職業は弁護士で, ジングアカデミーでは, 1836-1839年に書記(Secretär)を, 1839-1842年に理事(Vorsteher)を, 1842-1887年に書記を務め, 約半世紀にわたって運営に携わっていた。
88. SUB Hamburg: SAH: 1: A: *Protocoll A*, S. 210。1869年の創立50周年祭のプログラムにも, 1835年から35年間で100,000マルク近くを慈善のための組織に寄付したことが記されている。以下を参照。StAH, Hamburger Singakademie, 50-jähriges Stiftungsfest der Sing-Academie. Hamburg, 1869, S. 21.

Citizens and Associations in the Free and Hanseatic City of Hamburg in the 19th Century: Focus on the “Easter Concerts” of the Singakademie

Fusa INDO

In Hamburg in the first half of the 1830's the increase in the number of poor people became a serious social problem, and many voluntary organizations for charity were established to support such people.

Hamburger Singakademie was a mixed choral association of dilettanti established in 1819, which was known to play an important role in developing civic musical life and choral musical culture in 19th century Hamburg. In addition, after the activities of Singakademie were examined in the primary sources, it was revealed that Singakademie was involved in charity as well. Hamburger Singakademie started to hold an “Easter concert” in 1835, which would have been given every year in the Easter Week since then. The profit from the concerts, which was gained by selling admission tickets and texts, was distributed to civic charitable activities in the city.

This study directed its attention to the Easter concerts of Singakademie, examined their social role and meanings in 19th century Hamburg, and then analyzed the commitment of the citizens to their society. The research was based on the proceedings of Singakademie, as well as on the primary sources of the senate and the churches which referred to its public concerts.

As a result of examination, it was revealed that the Easter concert of Singakademie was a type of citizens' reaction against social problems of poverty in the city, on which charitable organizations of voluntary citizens worked. Hamburger Singakademie took a role in supporting their activities on the financial side by donating the profits from the Easter concerts to them. The partnership between Singakademie and the charitable organizations revealed that various civic organizations were working in cooperation with each other to make the society better then, which reflected the sense of duty of the upper-class citizens to serve the community of Hamburg. Singakademie was an association which was acting in the social context of 19th century Hamburg. It contributed to promoting the common good as well as the musical culture of the city.

Keywords : 19th Century Germany, Hamburg, associations, Singakademie, charity